

登場人物

清水 梓（しみず あずさ）

二十四歳

中堅企業の経理課 社員

高橋 理人（たかはし りひと）

三十七歳

清水梓が所属する経理課の課長

外見：短く整えられた黒髪。知的な印象を与える切れ長の目。スマートな体系。

性格：冷静沈着で論理的。仕事においては頭の回転が速く周りの信頼も強い。部下への指示は的確で感情を表に出すことは少ないが、実は部下想いな一面ももつ。

趣味：チェス、読書、投資

＊ ＊ ＊

「ん……っ、あ……か、ちょう……」

漏れそうな声を必死に飲み込んだ。代わりに会議室の椅子がギシッと鳴る。

（だめ、声、出しちゃだめだって……。今は仕事中……誰かに聞かれたら……）

必死に声を我慢してるけど、下腹部の奥がぎゅっと熱く疼いている。

もう、どれくらいこうしているだろう。業務中なのに、快楽に夢中で時間の感覚がわからなくなっていた。

「……はあ……っ、さっき、の……かちょう、かっこ、よすぎ……」

手が止まらないのは、さっきの光景が焼き付いて離れないから。

営業部長に詰め寄られた時の、課長の姿。あの冷静な声。『規定外の経費精算は認められません』。ぴしゃりと言った時の、あの涼しい目元。

知的で、厳しくて、でも、だからこそ、たまらなく……そそられる。

普段、私たちと接する時もそう。

「清水さん、この資料、もう一度確認してくれるか」

低くて少し甘い声で呼ばれるだけで、胸が高鳴る。課長の指示がもらえるなら、いくらでもやり直したいと思ってしまう。

「……ああ、すまない。私の指示が曖昧だったな」

たまに、少しだけ見せる優しいところが、ずるい。

もっと、近づきたい。触れたい。課長の声で、名前を呼ばれて、課長とえっちなことをしてみたい……仕事中的なのに、そんな妄想ばかりしてる日々。

「んう……っ！かちよう……」

そして今、私の手には、課長が愛用している銀色のペンが握られている。

その先端が私のクリトリスに当てられ、愛液がとろりと付着し、テカテカと光っている。探るように動かしていたキャップの先端が、いちばん感じるところに、こり、と当たった。硬い感触が、指だけの時とは全然違う、鋭い快感を呼び起こす。

「はあう……だめ……とまらない……」

（課長がいつも握っているこのペンで、課長のことを考えながら、こんな……悪いことしてるのに、気持ちよくて、とけちゃいそう……）

このペンは課長がいつも使っている。今日のお昼休み、ふと課長のデスクを見ると、このペンが置きっぱなしになっていた。私は考える間もなく、周りに誰もいないことを確認して、そのペンを事務服のポケットに忍ばせた。

そしてまっすぐこの会議室に来て鍵をかけ、手が勝手に、ペンをパンツに当てて、あそこをなぞっていた。

「はぁ……っ、は……、かちよ、の……ペン……」

もう一度、ゆっくりと、ペンの先端をクリに押し当てる。冷たくて、硬くて、つるりとした感触がクリに伝わり、びくんっ！と身体を跳ね上げる。

「ん……っ！……あっ、こし、うごいちゃ……」

私はペンをクリから離し、改めて見つめる。

銀色にキラキラ輝きつつも、細かい傷がついていて、長い間愛用していることがわかる。そういうモノを大切にすると、かっこいい。

ペンをうっとり見つめながら、自分の指をとるところになったおまんこに突っ込む。すでに座っている椅子には愛液が垂れているが、あとから拭けばいい。

「かちよう……んっ……はぁっ……」

そして私は、その冷たいペンを……啜えた。クリをいじっていた先端ではなく、課長が

いつも握っている上の部分だ。

「……っ、ふ、んう……！」

ペンに染みついた課長の臭いが口いっぱいに広がる。

「……っ、ん……っ、ふ……っ」

私は夢中でそのペンを味わった。課長の手つきをイメージしながら……それだけで、私のあそこはさらにじゅくじゅくと熱を持っていた。

「……は……あ……っ」

口を離すと、銀色のペンがてらてらと光っている。私はそのペンをあそこにそっと挿入した。

「あっ、きもち……い……入口の気持ちいい……」

そして、ナカに差し入れたペンをゆっくり動かす。

くちくち……くちゅ……くちゅくちゅ……♡

「は……あ……かちよう……っ」

課長のモノが、私の中で動いているのを想像する。いつも無表情だけど、でも……セックスの時はどんなことを言うんだろう。「こんなに濡らして……股を開いて……清水さんが淫乱な人だったなんて思わなかったよ」脳内の課長が耳元で囁く言葉を妄想する。

「あつ、ん…………やっ、ごめんなさ……っ」

（「随分良さそうだ……もつと擦って刺激したらどんな風に乱れるんだ？」）

「ひう……っ、んっ…………かちようっ……もつとお……」

（「腰も揺れて、いやらしいな。ほら、イきたいだろう？快感に集中するんだ」）

「んっ、んう…………っ……ふぁ…………♡」

くち……ぐち……♡くちゅくちゅ……♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……♡♡♡

私はペンを動かすスピードを速くする。ぐちゅぐちゅと愛液がかきみだされ、いやらしい音が会議室に響く。

「んっ、あ、たかはしっかちよう…………っ、すき、すきです……」

いつの間にか声は大きくなり、あそこからもいやらしい音が出ているが、誰も聞いていないから、大丈夫。

「あつ、いくっ、イッちゃい、ます…………っっっ♡かちよう…………ッ♡♡♡」

そして私は、課長のペンをぎゅうぎゅう締めながら絶頂した。

「はぁ…………は…………かちよう……」

私は、自分の愛液でべとべとになった課長のペンを、ライトに照らしてもう一度見た。課長のペンが、私の愛液でぬるぬるになっている……その事実だけで、もう一度イって

しまいそうなくらいキュンとした。

＊ ＊ ＊

それから、土日を挟んで三日が経った。

私は今、第3会議室の硬い椅子に座って、高橋課長の言葉を待っている。

よりにもよってこの部屋に呼び出されるなんて……。しかも課長と二人きり。いろいろな理由でドキドキしていた。

今朝のことだ。月曜日の気怠さに嫌になりつつも、自分のデスクの椅子に腰を下ろした、まさにその時だった。

「清水さん」

背後から低く落ち着いた声がして振り返ると、高橋課長が立っていた。

（高橋課長だっ♡嬉しい……でもなんだろう？）

「あ、か、課長……！ おはようございます……！」

その距離の近さに、少し緊張して、しどろもどろになってしまう。課長が普段使っているコロンがふわりと香った。いい匂い……。

「おはよう。すまないが、少し時間をもらえるか。第3会議室に来てほしい」

第3会議室と聞いた瞬間、あの日の記憶が勝手にフラッシュバックする。ひんやりとした椅子の感触、自分の熱い吐息、そして……あの銀色のペンの冷たさ。

（いや、あの日のことは関係ないはず！）

だって、ペンはあのあと綺麗にふき取って、課長が席に戻ってくる前に何事もなかったようにデスクに返しておいたから……バレてるはずない。

「……は、はい……。わ、わかりました。すぐ、行きます……」

そして今、私はその第3会議室で、高橋課長と向かい合っている。課長は少しの間黙っていたけど、ゆっくりと私を見て口を開いた。

「時間をとってすまないね。回りくどいのは嫌いだから、単刀直入に聞くが……先週の金曜日、君はこの会議室を使っていたか？」

（ば、バレてる……!? なんだ!?)

課長の言葉を聞いた瞬間、全身の血の気が引いた。でも、どうして？ 頭がパニックになる。

「……い、いえ……私は、使って、ません……」

なんとか答えたけど、声が震えてしまう。絶対、怪しまれてる。

「そうか」

課長はそう言うのと、ポケットに手を入れ、銀色の、細長い……見間違えるはずもない、あのペンを取り出した。

「実は、このペンなんだが」

ペンを指で弄びながら、課長は淡々と続けた。

「ずっと愛用していてね。書き心地がいいというのもあるのだが、一番気に入っている理由は別にある。なにか分かるかい？」

「いえ、わからないです……」

「少し古い型なんだが、実はね、これはボイスレコーダーとしての機能もついているんだ。周囲の声を録音できるんだよ。これが便利でね」

ボイスレコーダー……？録音？その言葉に、嫌な予感が胸をよぎる。

「先週の金曜日の午前中、営業部との打ち合わせで、議事録を取るために会話を録音してこうと思って使ったんだが……その打ち合わせの後、うっかり録音機能を停止するのを忘れてしまっただけ」

え……？録音機能を、止め忘れた……？まさか。私の頭の中で、点と点が繋がり、最悪の線を描き始めていた。嘘だ、そんなはずない。

「そして、そのペンを、私は昼休みにデスクに置いたまま席を外した。午後イチの長い会議が終わって席に戻ってきた時には、ペンはそこにあったんだが……」

課長はそこで言葉を切り、手の中のペンをじっと見つめた。その沈黙が、死ぬほど長く感じる。

「帰宅後、議事録を取ろうと音声を再生して驚いたよ。私が録音を切り忘れたせいで、このペンには、ご丁寧にも、午後の数時間分の音声記録されていた」

ゴクリ、と生唾を飲み込む音が、静かな会議室に響いた。私の顔から、急速に血の気が引いていくのが自分でもわかった。

「つまり……清水さん。君がこの会議室で過ごしていた……一部始終の音声、全て、このペンに録音されているということだ」

課長の静かな宣告が、私の鼓膜を突き刺した。録音……されてた？ あの時の、私の……あんな、はしたない、恥ずかしい声が……全部……？ 頭の中が、ぐるぐると白く染まっていく。目の前が、真っ暗になった気がした。

「あの、ごめんなさい。本当に……つい……」

私はもうパニックになり、口をパクパク開け何かを言おうとするが、言葉が出てこない。  
(終わった……お父さんお母さんごめんなさい。明日から私は無職です)

絶望に打ちひしがれている私に、高橋課長は思ってもいないことを言い出した。

「そうか、やつぱり君だったんだな……わかった。今から出張に行く。そのまま直帰になるから、準備をまとめなさい十分後に会社のロビーで」

「え……出張……？ どういう……」

「いいから。上司命令だよ」

優しい笑顔を浮かべそう言うと、課長は部屋から出ていった。

＊ ＊ ＊

「あの……私、クビですよ？ これ、どこに行くっていうんですか？」

私は車の助手席で、完全に自棄になってそう言った。

ハンドルを握る高橋課長の横顔を盗み見る気力もない。

（だって、あんな恥ずかしい声、全部聞かれちゃったんだもん……）

課長のペンで、課長のことを考えながら、あんなことしてたなんて……。バレてしまったのだからもうどうすることもできない。ああ、もういっそ、クビならクビって早く言ってほしい。せめて最後にいいオナニーができてよかった！ なんて、頭の片隅でバカみたい

なことを考えていた。もう、まともな思考なんてできっこない。

シーン、と静まり返った車内。気まずい。気まずすぎる。何か、何か言わないと……。

「……ていうか、課長。急に職場を離れて大丈夫なんですか？ 課長がいなくなったら、みんな困っちゃうんじゃない？」

課長がいらない経理課なんて、正直想像できない。課長の冷静な判断と的確な指示があるから、なんとか回ってるようなものだ。今頃、誰か困っているだろう。

すると隣から、ふふ、と微かな笑い声が聞こえた。

「そんなことを心配してくれるなんて、いい部下を持ったものだ」

え…それって、嫌味？それとも……？ いつもポーカーフェイスな課長の、ほんの少しだけ口角が上がっているような気がして、余計に混乱する。

（クビにする相手にかける言葉じゃないよね？）

「いや、でも、本当に。先日 of A 社の決算報告書の件とか、あのややこしい補助金の申請だって、課長がいなかったら絶対もっと時間かかってましたよ。私じゃ、とても……」

「君が的確に資料をまとめてくれたから、スムーズに進んだんだろう」

「え？」

思わず課長の方を見るが、課長は前を見たまま、こともなげに続けた。

「特に、あの関連会社の損益分岐点の分析。あれは君が担当したパートだったな。なかなか鋭い視点だと思ったよ」

（私の仕事だって、知っててくれたんだ。あの資料、遅くまで残業して、何度も数字見直して。課長の役に立ちたい、少しでも認められたいって、そればかり考えて…）

「あ……ありがとうございます……」

予想外の言葉に、胸の奥がズキン、と甘く痛んだ。クビになるかもしれないって時に、褒められたって……。でも、やっぱり、嬉しいと思ってしまう自分がいる。単純だ、私。

「君はもう少し、自分の仕事に自信を持ってもいいんじゃないか？」

「……はい」

「まあ、今回の件は、その自信の表れ方が少々……特殊だったようだが」

うぐっ……！　せっかく少し持ち直しかけたのに、また奈落の底に突き落とされた気分だ。顔から火が出そうで、私は慌てて窓の外に視線を逃がした。流れていく景色が、やけに現実味なく見える。

しばらく沈黙が続いた後、車のスピードが緩やかになった。カーナビの音声が、目的地周辺であることを告げている。

「さ、着いたよ」

そう言つて課長が車を滑り込ませたのは、明らかに高級そうな、ゲート付きのマンションの地下駐車場だった。見たこともないような外車が何台も停まっている。

(な、なにここ……?)

呆然とする私に、課長はエンジンを切りながら、あっさりと言つた。

「僕の家だ」

「え？」

一瞬、言葉の意味が理解できなかった。僕の家？ 課長の……家？

「降りて。ついてきなさい」

有無を言わさぬ口調で車を降りるやうにうながされ、私は訳が分からないまま、シートベルトを外すしかなかった。

課長の部屋……？ いつか、もし万が一、課長とお付き合いできる日が来たら、その時は部屋に行ったりするのかな、なんて、それこそバカみたいな妄想をしたりしてたけど……まさか、こんな形で、しかもバレた直後に、実際に来ることになるなんて……。

＊ ＊ ＊

課長の部屋は、広くて綺麗な1LDKだった。

「さ、そこに座りなさい」

課長の指が、L字に置かれた皮製の上品なソファを指さしている。

「し、失礼します……」

「録音を聞いたときは驚いたよ」

「……本当にすみません」

課長もジャケットを脱ぎ、ソファに腰かけた。

自宅にいるからか、少しリラックスした雰囲気になった課長が、なんだか色っぽく見える。

「いいんだ。別に僕は叱ったり、クビにしたいわけじゃない。部下の仕事のやる気をあげるのが上司の務めだからね。だが、仕事を抜け出して勝手に一人で気持ちよく…現実逃避するようなことは、上司としては見過ごせないな。もうしないって約束できるかい？」

「はい！もうしません！」

「よし。……ただ、一つ心配なんだ」

そう言いながら、課長が胸ポケットに差していた例の銀色のペンを取り出し…ペンの一番上の部分をカチッと押した。

『あつ、きもち……い……入口の気持ちいところ……』

ペンからはかなり鮮明な音で……録音された私の喘ぎ声が流れてきた。「ちょっ……課長！やめてください！」

課長は普段職場では見せない少し意地悪な笑顔で、黙ったまま私の様子を見つめている。

『ひう……んっ……かちようっ……もっとお……』

『んっ、んう……っ……ふあ……♡』

自分の声が課長の部屋に響き渡り、顔が爆発しそうなくらいに熱い。

『んっ、あ、たかはしつかちょう……っ、すき、すきです……』

『あつ、いくつ、イッチゃい、ます……つつっ♡かちよう……ツ♡♡♡』

恥ずかしすぎる言葉を言いながらオナニーに夢中になって、すっかり絶頂するところま

での音声が録音されている。この静かな空間とのギャップでとんでもない辱めを受けている気分になる。

「あの、課長、許してください……」

「僕はね、心配なんだよ」

課長がようやく口を開いた。

「こんなに淫らな部下に、禁欲の命令を出したら、仕事に手が付かないんじゃないかってね」

「そ、そんなことないです！大丈夫ですから、もう忘れてください……」

「だから、考えたんだ。僕がどうすればいいのか」

課長は仕事の命令をするように、優しく言った。

「もう一度、ここで、このペンでオナニーしなさい。私が見てあげるから、ここでたっぷり気持ちよくなって、欲求を発散するんだ」

（え!?……ど、どういうこと!?）

突然の言葉に、パニックになりつい大声を出してしまう。

「そんなこと……で、できないです!」

「できるできないじゃない、やるんだ。どうせこのペンでオナニーしたことを忘れられず、

家でも思い出してオナニーしていたんじゃないのか？」

（っ……！うう……おっしやる通りです……）

図星だった。あの興奮が忘れられず、家で思い出すだけであそこがじゅんとした。毎晩思い出しながら、自慰に耽っていた。

「ほら、このペンを使いなさい」

ソファに腰かけた課長からペンを差し出され、私はつい受け取ってしまった。

「やるんだ」

有無を言わさない課長の口調に、私は従うしかなかった。

……違う。嫌々従うのではなく、私はいつの間にか興奮していた。大好きな課長に目の前でオナニーしろと命令されていることに。

「わ、わかりました……」

「では、まずはどうやって始めたのか、ひとつずつ説明しなさい」

「まずは課長のペンの、においをたくさんかぎました……」

「なるほど、だから録音に荒い息遣いが入っていたのか。じゃあ、その日のようににおいをかぎなさい。この土日も出勤していたから、そのペンでたくさんさんの資料にサインをしたんだ。そうだ、君の報告資料に直しも入れたかな。土日分の僕の手汗がしみついているよ」

「~~~~ッ!？」

私がオナニーに使ったと知った後も、平気でこのペンを使う課長の異常さに驚きながらも、このペンに私の愛液と課長の汗が入り混じっている事実に興奮を隠せなかった。

「し、失礼、します……くんくん……はあ……んっ…♡課長のペン、今日もいい匂い、です……」

ペンは相変わらず金属のにおいと課長のにおいが混じった特別なにおいがして、嗅いでいるだけでくらくらしてくる。

「それで、姿勢はどんなふうにしていたんだ？」

「はあ……会社の会議室の椅子の上で、足を開いてました」

「じゃあそれも再現しなきゃダメじゃないか」

「っっ……わ、わかりました……」

私は課長の家のソファの上で、あの日と同じように足を開いた。角度的に課長に私のパニツを見せつけるような体勢になってしまふ。

（課長の家で、課長の目の前でこんな格好するなんて……これって本当に現実??）

明らかに非日常の時間が流れているが、そこには確かに仕事に取り組むときのような視線の課長がいて、その現実にはドキドキしてしまう。

「もうパンツにシミができてるぞ。全く……こんなにすぐ濡れるような淫らな頭じゃあ、これまでも仕事に集中できていたのか怪しいな」

課長はソファにもたれかかり、愉しそうに私の淫らな恰好を見ている。

「それで？ ペンのおいを嗅いだけでパンツにシミをつくって、次はどうしたんだ？」

「はい……パンツの上からペンをあそこに当てました……」

「あそこ？ 仕事の報告ではあいまいな表現は禁止だと教育しなかったか？ 相手に伝わるようにはっきりと伝えないとダメじゃないか」

「も、申し訳ありません……あそこ……パンツの上からおまんこにペンを当てて、つつーっとなぞるように課長のペンをあてました」

おまんこ、という言葉聞いた瞬間、課長の眼鏡の奥の目つきが、少し怪しくなった気がした。

「なるほど。ペンのおいを嗅いでまんこをぐじゅぐじゅにするだけでは飽き足らず、私のペンを湿ったパンツに擦って気持ちよくなったわけか。就業中に、会議室で……これは重症だな。ほら、ここでその欲求を解消して仕事に集中するために、同じようにやるんだ。私に見えるように、そのペンでおまんこを刺激しなさい」

「ッ……は、はい……っ！……ん、ああ……っ♡」

私は言われるがまま、ペン先でつつーとパンツ越しにおまんこを刺激する。カリカリ、とおまんこの入口やクリを擦っていると、パンツ越しにも冷たく硬い感触が伝わり、どんどん下半身が熱くなっていく。

先日の会議室のハラハラ感も興奮したが、今日は想い人の課長に見られ、指示されている。あの銀色のペンでオナニーするように命令されている。その事実が、イケないことをしているみたいで一層心臓のドキドキを高まらせていた。

「あうっ……♡ふう……んっ……いいっ♡」

「どんどんシミが大きく、濃くなっていくぞ。上司の筆記用具でクリを刺激して、のぼせあがっておまんこを濡らして……普段の清水さんからは想像がつかないな」

「ごめんなさっ……♡あっ、ああ……♡普段は……ちゃんと仕事してますっ♡」

「嘘は良くないな。私のことをチラチラ見ていることは知っているぞ。どうせエロい妄想ばかりして、仕事中也パンツを濡らしていたんだろう？」

（っ……こっそり盗み見してるつもりだったのに、気付いてたの!?……うう、たしかにそういうこともあったけど……カッコいい課長が悪いんじゃない！）

私の手はいつの間にか夢中になり、パンツが伸びてしまうくらいペンを押し込んでしまっていた。

（やっぱり課長のペンだと興奮しちゃう……このペンでもっと気持ちよくなりたい…）

ぼーっとしてきた頭でそう考えていると、課長は私の気持ちがわかっているように続けた。

「ほら、清水さんの可愛いパンツがダメになっちゃうじゃないか。次は何をしたんだ？どうせ私のペンを、このじゅくじゅくに濡れたおまんこに突っ込んだんだろう。後半、録音データからはぐじゅぐじゅと下品な音がしていたよ」

「ひ…ひう…っ♡あ、はっ、はい…そうです♡かちょうのペンをわたしのおまんこにいれまして……っ」

「こんな細いペンでも満足できるものなのだな。許可するから、同じようにやってみなさい」

「あっ…ありがとうございます…♡し、しつれいします♡あっ…ふぁ…んんう…っ♡」

私はパンツを横にずらし、当時と同じように、いや当時よりさらにびちょびちょになりひくひくしているおまんこに、ペンを挿入した。ひんやりとした感触が課長の厳格なイメージと合わさって、まるで課長が入ってきてわたしのおまんこを触ってくれているような気持ちになる。

「ここでは声は我慢しなくていい。君の痴態を見ているのは私だけだ」

（課長の前が一番、恥ずかしいのに……！でも、観察するみたいになじっと見られると、あの日よりもっと……）

「あっ♡やっ……かちようっ……かちようのペン♡んッ……入ってきてます♡かたくてっ、ナカをコリコリ刺激されますう……♡」

「すごいな。想像はしていたが、出し入れするたびに私のペンが清水さんの愛液を掻き出して白濁していくね。録音された音より、さらにじゅぽじゅぽ音が鳴っているが、もしや私に見られてこの前より興奮しているんじゃないだろうな」

「ひっ、あ……♡だって……かちように見られたら……あ……♡ああっ……♡はずかしっ……」

「君は真面目で優秀な社員だと思っていたが……今後は認識を改めなきゃいけないようだな」

「ああ……♡ちがっ……おしごと♡がんばりましゅ……♡ごめんなさい……♡あう……んんうッ♡」  
「いいんだ。仕事というのは、時に自分の欲求を突き通すことも必要だからね……今はやりたいようにやりなさい。私が責任を取るから、大丈夫だ」

「ひあッ……かちよう……♡んおっ……♡ぺん……♡！きもちい……♡♡あたるうう……♡」

「そんなに太くはないはずだが、随分な乱れ様だな。……明日からもこのペンは使用するつもりなんだが、その様を見て君が発情してしまうかもしれないね」

「やつ…そんなっ…！ひうつ、恥ずかしい、ですう…♡」

「そう言いながら、掻き回す速度が早くなってる気がするが？ぐちゅぐちゅと卑猥な音が大きくなっているぞ」

（課長、これからもこのペンを使うんだ…♡私のおまんこ掻き混ぜたペンでまた…お仕事する課長…♡♡♡）

ぐちゅぐちゅ♡と音を立ててペンをおまんこに出し入れする。私の中をかき乱すように、そして私の好きなところをペンがカリカリと刺激するように。二度目だから最初から気持ちいいところに当てることできて、快楽が一気にのぼりつめる。

「すごいな…ペンの角度的に、おまんこの上側を刺激されるのが好きなのか？」

「あ、んっ…♡んん…ッ♡あっ♡あっ♡ここが…♡好きなんですう♡んんうつ…あたるう…♡♡」

「ここじゃわからないと何度言えばいいんだ。一度言ったことは二度言わせるな」

「ひう…ッ…ごめんなしゃい…でも♡あつ、わからなくて…♡かちよのぺんが気持ちいいところにごいぐいきてます…ッ♡」

「全く…自分の身体のことなのに勉強不足だな。評価が下がるぞ。そこはGスポットというんだ。私のペンでGスポットをグイグイ押し込んで気持ちよくなっているんだよ、お前

は」

「ふあ、ああっ…♡じいすぽ…？♡じいすぽとをぐいぐいするのきもちい…♡いい…♡」

「Gスポットも知らないのに、社内でおナニーする変態だとは…えっちなことに興味はあるが実戦経験は少ないタイプか？」

「やっ…んんっ…ごめなさ…っ♡じいすぽと、覚えましたからあ…ッ♡」

「まあ、それはそれで躰がいがあるよ」

「へっ？♡んあ…っ♡んっ、んうっ…♡♡」

「ああ、綺麗なピンク色だったおまんこが、赤くなってるな。頑張った成果が出ているぞ。ほら、がんばれ。もっと私のペンでおまんこをかき回せ」

課長に見られているという事実が興奮を煽って、課長の言う通りにしなきゃ、言う通りにしたい、という気持ちで頭がいっぱいになる。

ぐじゅ♡ぐちゅ…♡じゅくじゅく♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「あい…♡あっあうう…♡かちよ、の…♡ひう…ッ♡ペンでいきそうっ♡です♡」

「ん？もうイキそうなのか？思ったより弱いおまんこだな…ああでも、録音データでもあっという間に絶頂していたな。その時、なんと言っていたか…たしか『高橋課長、好き

です』だったかな」

「ひっ…？やっ…あぁうっ♡んンッ…んっ…ち、ちが…！！」

「おや、違ったか？」

「ちがわなっ…！！ごめんなさい♡いぐ…ッ♡んううっ…かちょうにみられていっちゃうう♡」

（こ、こんな形で課長へ告白することになるなんて…でも課長の目が…♡）

「ほら、当時と同じようにイキなさい。人の目を気にしないことも、社会人として時に重要だよ」

「…はひ♡かちよ…♡高橋かちょう…♡かつこよくてすきです♡あっ、んんっ…♡かちよ♡いくいくいく…っ…♡いっちゃんいます♡」

「許可する。イけ。上司のペンでオナニーして、淫らにイクんだ」

「ッ♡♡…かちょううう♡いぐうううう♡♡♡♡♡♡」

びくっ♡びくびくんッ♡

私はありえない状況での絶頂に、感じたことのない幸福感と背徳感に包まれていた。

身体に力が入らず、だらりと足をおろす。ぐちゅり、とおしりのあたりに水気を感じる。「おやおや、私の家のソファなのに、清水さんのおまんこ汁でびちょびちょだ。皮製で高

かったんだがな」

「ご……ごめんなしや……こんなに出てるって気付かなくて……」

「いいだろう。部下の不始末の責任を取るのも、上司の仕事だ。それはいいんだが……やはり君は私が想像していた真面目な社員とは全く違う人物だったようだな。上司の私物を自分のおまんこに突っ込んで、私に見られているにもかかわらず淫らな体勢で絶頂するなんて」  
「はひ……♡わたしは本当はこんななんです……」

「素直になってくれるのは嬉しいが、君が仕事に集中できないと、困るのは私なんだよ。しっかりしてもらわないと困るな……そうだ、先日、組織マネジメントの本を読んだんだが、部下が仕事に集中するためには、余計な心配事や関心を解消するのが一番だそうさ。ほら、ほかに何かしたいことがあれば私に言いなさい」

「え……ダメです……!! 言えません……っ」

「これは、上司命令だ」

「うう……」

（普段通りの課長みたいに指示をしてくるけど、なんかすごくエッチな雰囲気……もしかして課長も愉しんでる??）

「課長にしてほしいことあるけど……絶対恥ずかしくて言えないですっ!」

「ほう。じゃあもう君の面倒はみれないな。この録音データも、仕事をサボった証拠として、会社に提出しなければいけなくなりそうだ」

「っ!?それだけは……」

「じゃあ言いなさい。怒っているわけじゃないんだ。君のためなんだよ」

厳しい言葉の後に、今度は優しく諭されて、私はするすると自分の欲求を口に出してしまっていた。

「か、課長の……下着のにおいをかぎたいです……」

（い、言っちゃった〜！恥ずかしすぎるっ！！）

「ほう……なるほど。君はやはり私物に興奮するフェチズムなんだね。表の顔を象徴する仕事道具も好きだが……本当は体臭が沁みついた衣類が一番なのか」

「うう……冷静に解説しないで下さい!!」

「いいだろう。実は昨晩は、どうしても朝までに仕上げないといけない経営会議の資料があったね。徹夜で作業していてシャワーを浴びる隙も無かったんだ」

「え……ということは……」

ごくり、と唾を飲み込んでしまう。

「すごく匂いが濃いかもしれないね。お気に召すかはわからないが、確かめてもらおう」

そう言うのと課長はするりとネクタイを外し、Yシャツのボタンを外した。インナーは白くて清潔なTシャツタイプの肌着だった。課長のスラっとした身体にびたりと張り付くようなびったりサイズで、細身のボディラインが見えていやらしい。

「まさか部下の前で裸になるとはな……ほら、これが欲しいのか？」

目の前で肌着もするりと脱ぎ、上半身裸になった課長が、見せつけるように脱いだばかりの肌着を私の顔の前にプラプラとぶら下げる。

（か、課長の裸……♡痩せ型なのに、引き締まった身体……♡今までたくさん妄想してきたけど本物すごい……♡♡）

ふわっ、と課長の甘いにおいがして、一気に欲求が押し寄せる。

「はう……♡すご♡濃いにおい……♡はあはあ……♡♡」

「どうした？息が荒くなっているぞ。エサを欲しがる犬みたいだ」

「ッ……ほしいです♡課長のおいがたくさんついたシャツ……♡くんくんしたいです♡」

「ふふ……いいだろう。私が一日以上着てたっぶり体臭がしみ込んだシャツのにおいを嗅いで性的欲求が高まる変態な部下を、指導してやる」

そう言うのと課長は、ぐいっとシャツを私の顔面に押し当てた。

「っ！……ああああああ♡しゅ……♡♡♡♡♡♡」

目の前が真っ暗になり視界が途絶え、同時に鼻と口から課長の濃いにおいが大量に入ってくる。視覚がない分、より匂いが明確に感じられ、脳みそがその香しいにおいでいっぱいになる。

「どうだ。これが欲しかったんだろう？私のシャツのにおいは、お好みだったかな？」

「ふぁい♡すごいです…♡す…はぁ♡濃くて、だいしゅきなにおいです♡」

ぐいぐいと顔にシャツを押し当てられ、視界と身動きを塞がれたことも、まるで課長に自由を奪われたようで興奮してしまう。

（こんな濃い課長の匂い、嗅いだことない…♡♡）

「ほら、どうせこのにおいを嗅ぎながら自分でおまんこいじってもっと気持ちよくなりたいんだろ？においでくらくらしした頭におまんこから快感がきたらどんなに気持ちよくなってしまうのかな？ほら、やれ。匂いを嗅ぎながらおまんこに手をつ突っ込んで、気持ちよくなれ」

「あ…ひゃい♡ふうふう♡…しつれいします♡」

私は課長に言われなくても、もう我慢できなくなっていた。

「んっ…かちょう♡…クリ触ってもいいでしょうか？」

「ほう？そっちも好きなのか。敏感なところが多くて、欲求の解消に時間がかかりそうだ

な」

「しゅみません♡」

「いいだろう。やりたいようにやりなさい。ただし私に見えるように、もっと腰を突き出して」

私はソファに深く腰を入れ、半ば寝そべるような体勢になった。おまんこをぐいっと上に向け、課長からよく見ていただけるようにする。課長は立ち上がり、上から私の顔にシャツを押し当てている。

「こ、これで見えますでしょうか？♡」

「いいぞ。布地が濡れてひくひくしたおまんこの形に張り付いていやらしいな。たしかにクリが最初より大きくなっているな。触ってほしくて主張しているクリを弄って、とろとろにしてあげなさい」

視界が塞がれて課長の声が脳みそに直接届くみたい。普段の課長からは考えられないようなえっちな言葉の羅列に、辱めを受けている気持ちになりさらに快楽に没頭してしまう。「ひゃい♡いいじします♡……んやああっ♡すごっ♡くるっ♡」

「なるほど。清水くんは中指で左右にこりこりするようにクリオナするのか。クリがさらにぷっくりしてきたな」

「ああっ…♡いわないで♡くださ…♡ああう…ッ♡きもちい…♡」

「だらだらとえっちなお汁がこぼれて私のソファを汚しているぞ。そんなにクリオナが気持ちいいのか」

「はふう…♡きもち♡いいでしゅ…♡クリこりこりっ…きもちいいですっ♡♡」

くりくりくりくり♡ぬちょぬちょぬちょぬちょ♡

「ああ♡しゅごい♡かちょうの、シャツのにおい♡かぎながらクリの刺激…♡んはぁ…脳みそにくるぅ…っ♡♡」

「ふふ……シャツがよだれでびちょびちょになってきているぞ」

「ふぁ…♡もうしわけ、ごさいませんっ…♡かちょうのシャツ、はぁ…かちょうのあせ…♡ちゅうちゅう吸いたいです♡」

「ソファだけじゃなくてシャツまで汚すなんて……はしたない部下だな。だが、清水さんのことがよくわかってきたよ。きっと、ほら……こうしたら嬉しいんじゃないか？」

そう言うと、ひんやりとした感触が私のクリを刺激する。まさか、これは……。

「ひゃっ…？♡これっ♡ぺ、ぺん…!?♡♡」

「そうだ。君の大好きな私のペンだよ。このペンでおっきくなったクリをペしペしと弾いたら、君のことだから悦んでくれるんじゃないかと思ってね。ほら、どうだ。私のペンが清

水さんのクリにあたると気持ちよくなるんだろう?」

「あひ…♡あううう…♡♡やっ、それえっ♡自分ですのどちがう♡」

パチパチパチとペンが一定のリズムでクリにあてられ、そのたびに刺激が高まっていく。  
(あつ、課長が私のクリ…ペンで叩いてる…♡クリ指導されてる…課長の一日蒸れ蒸れシャツだけでも興奮やばいのに…むりっ!気持ちいいしか考えられない…♡♡)

「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あう…♡♡かちよう…♡ああああ♡♡♡♡」

課長は無言でペンを動かし続ける。私はその刺激とにの相乗効果でどんどん高みへ昇っていく。

「ひあっ♡あっ♡あっ♡あっ…♡ああッ…♡ぺん、ぺちぺちい…♡いく♡いく♡いっちゃんかもです♡」

「なんだ、またいくのか。全く、ストレス耐性に難ありだな……」

「ペンがクリにくるたび…かちように指導されてるみたいでっ…あっ、あっ♡ああッ♡かちよの、においかぎながらっ…クリ犯されていっちゃんますうう♡♡」

「指導されることにも興奮しているのか?…いいだろう。ほら、ぱちぱちとクリをいたぶってるぞ。これは強すぎか?それとも気持ちいいか?」

「ほお…♡♡あッ♡♡つよ…♡♡つよいのすき…♡♡かちようっ…ごめんなさい♡もうだめえっ

♡♡♡♡

「イけ。いきなさい」

「あうう……♡ばちばちしちゃあ……ッ！いぐッ♡いぐうううううううう♡♡♡♡♡」  
視界がふさがれ、課長の匂いと声とクリへの刺激だけの世界で、頭のとっぺんから爪先まで電撃が走るような快感に包まれ、絶頂に達した。

「はあ……はあ……かちよう……わたし……」

「ふふ、またイってしまったな。ちよつと耐性がなさすぎるぞ。根気強く指導が必要そうだな」

大好きだった高橋課長に、クリを虐められている事実が、ひとりでする時の快感とは桁違いのもので、息を整えるにも時間がかかってしまう。

「うう……♡課長のシャツ汚してしまいました……」

「構わないさ。それより、気持ちよくてとろとろになってる君に、これを与えたらどうなるかな？」

そう言うのと、課長は私のシャツを取り上げ、一瞬視界が明るくなる。

「まぶしっ……ふわっ！」

目を開けようとした瞬間、また新しい布が顔に押し当てられる。

その匂いは先ほどまでのシャツの何倍も濃く、甘く、エッチなおいだった。

「これ、まさか……」

「私が24時間以上履き続けたパンツだよ。だいぶ蒸れてしまっているが、いかがかな」

「すくすくっ♡♡♡♡♡あ、ッあああああゝゝゝッッ♡♡♡♡♡」

（体験版ここまで）